

## ミンダナオ和平を支援 落合直之さんが中曽根康弘賞を受賞

01



今年で12回目を迎えた中曽根康弘賞の授賞式



中曽根会長(右)と奨励賞を受賞した落合さん(左)

長年、フィリピン・ミンダナオの和平プロセスを支援してきたJICA職員、落合直之さんが、公益財団法人世界平和研究所が主催する「中曽根康弘賞」の奨励賞を受賞しました。

中曽根康弘賞は、政治・経済・文化・科学技術などの多様な分野において、国際的に優れた業績を上げた人に対して毎年贈られる賞で、今年で12回目を迎えました。

1991年にJICAに入構した落合さんは、約14年間にわたり、ミンダナオ和平構築に向けたさまざまな支援に携わってきました。2010年からは、フィリピン政府とモロ・イスラム解放戦線(MILF)の停戦合意を受けて発足した「ミンダナオ国際監視団(IMT)」（本部：コタバト市）の一員として、社会・経済開発支援を担当。現在は、和平プロセスを推進するため、コミュニティ開発や組織・人材育成を目的としたプロジェクトのリーダーを務めており、こうした活動が評価され、今回JICA職員として初めて受賞者に選ばれました。

7月1日には東京都内で授賞式が開かれ、関係者ら約100人が出席しました。式の冒頭、世界平和研究所の中曽根康弘会長が、「世界の政治や経済は依然として混沌としています。これを機に、受賞者の方々がますます活躍されることを期待しています」と挨拶しました。

その後、落合さんを含む3人の受賞者に、中曽根会長から記念の盾が手渡されました。落合さんは、関係者や家族に対する感謝の言葉を述べ、「フィリピンが安定した国家として繁栄を続けることができれば、日本を含めた近隣諸国への政治、経済、社会的貢献は計り知れません」と語りました。そして、「この栄えある賞を糧に、今後も現地の人々との対話を重視し、ミンダナオ和平プロセスの支援に全力を尽くします」と決意を述べました。

第12回中曽根康弘賞では、落合さんの他に、優秀賞に東京大学先端科学技術研究センターの池内恵准教授、奨励賞に国際大学国際関係学研究所の熊谷奈緒子准教授が選ばれました。

## 北岡理事長がセネガル、ナイジェリアを訪問

02



ナイジェリアの首都アブジャで、ボコ・ハラムによって発生した国内避難民のキャンプを視察する北岡理事長

北岡伸一JICA理事長は、6月12日から17日にかけて、セネガルとナイジェリアを訪問しました。

セネガルのマツキー・サル大統領は、北岡理事長との会談で、日本が同国の国家開発政策「セネガル新興計画(PSE)」に基づいて協力事業を展開していることや、同国への青年海外協力隊派遣数が世界最大規模であることに言及し、感謝の意を表明しました。

北岡理事長は、首都ダカールで長年の協力の成果である「セネガル日本職業訓練センター(CFPT)」などを訪問。地方部では、無償資金協力で建設された給水施設や母子保健に関するプロジェクトの現場などを視察しました。

ナイジェリアの訪問では、北岡理事長はオシンバジョ副大統領らと会談し、第6回アフリカ開発会議に向け、両国の協力関係を強化していくことを確認しました。滞在中、北岡理事長はボコ・ハラムによって発生した国内避難民のキャンプを訪問。その他、都市給水と太陽光発電の各プロジェクト現場を視察し、日本の協力がナイジェリアの発展に貢献していることを確認しました。

## ケネディ駐日米国大使が青年海外協力隊訓練所を視察

03



派遣候補者と歓談するケネディ大使

6月7日、ケネディ駐日米国大使が福島県にある二本松青年海外協力隊訓練所を視察し、派遣前の青年海外協力隊の候補者と交流しました。

158人の青年海外協力隊の候補者に激励のメッセージを送ったケネディ大使は、その後、フィリピンやガーナなどに派遣予定の候補者と懇談し、参加の動機や帰国後の計画について話を聞きました。懇談後、候補者は、「勇気を持って前進して、という大使の言葉が印象的だった」などと話し、派遣に向けて決意を新たにしました。

大使の父ジョン・F・ケネディ元大統領が1961年に創設した米国民平和部隊は、ほぼ同じ時期(1965年)に発足した青年海外協力隊にも影響を与えています。今回の視察は、米国民平和部隊と同様に、草の根レベルで途上国の経済・社会発展に取り組みる青年海外協力隊などのJICAボランティアに、大使が強い関心を持っていていことから実現したものです。

今後、日米のボランティアが連携・共働していくことが期待されます。